

## 第 150 回 岐阜歯科学会例会

- 1) 開催日 平成17年2月19日(土)午後1時より
- 2) 会場 朝日大学1号館3階 第1大講義室

### 特別講演

座長 関根 一郎 教授

#### 1. 岐阜県における介護保険の現状と制度改革について

岐阜県歯科医師会理事・福祉医療委員会委員長  
水野 明広 先生

介護保険制度が始まり5年が経過し、当初の混乱も落ち着き、また平成15年には、3年ごとの改訂があり、現在は制度が定着してきました。しかし一方では、当初の基本理念との相違点や新たな課題が指摘されています。

歯科界にとっても介護保険が導入されたことにより、福祉分野への関わりを深めるきっかけとなり、訪問歯科診療・口腔ケアなど要介護者への歯科医療の提供が推進されてきました。岐阜県においても160名程度の歯科医師が各地で介護認定審査員として出務し、他の医療関係者や福祉関係者との連携も深まりました。

今後迎える高齢社会で増加する要介護高齢者の「食」に関してや、誤嚥性肺炎の予防など、歯科医療・摂食嚥下リハビリ・口腔ケアについて、我々歯科界が果たす役割は大きくなってきています。

今回の発表では、現在の岐阜県における介護保険の状況・歯科の居宅療養管理指導の状況を報告すると共に、平成18年度介護保険制度見直しに向かっている社会保障審議会の考え方やモデル事業、歯科としての係わりについて述べます。

座長 田村 康夫 教授

#### 2. フィールド成果を科学して29年

朝日大学歯学部口腔感染医療学講座  
社会口腔保健学分野 磯崎 篤則 教授

1975年から始まった旧穂積町のフィールド活動は、現在(2005年)も継続実施している。1小学校が積極的なう蝕予防を導入したいとの話から始まった活動が、現在では1幼稚園、4小学校、2中学校、成人式に口腔診査を行うまでに広がった。研究室関係者全員が協力し、信頼ある視診型口腔診査のために努力してきた。診査基準がキャリブレーションされ、診査記録者もベテランが行い、同じ診査器具を用いて30年、得

られた成績から数多くの成果を見出せた。

1. フッ化物濃度500ppm週5回法によるフッ化物洗口法
  - a フッ化物洗口開始年齢によるう蝕予防効果の差
  - b 歯の萌出時期とフッ化物洗口開始時期によるう蝕予防効果の差
  - c う蝕感受性の差によるう蝕予防効果の差
  - d 小学校の規模によるう蝕予防効果の差
2. フッ化物濃度250ppm週5回法によるフッ化物洗口法
  - a フッ化物濃度によるう蝕予防効果の差
  - b 学校の規模によるう蝕予防効果の差
3. フッ化物濃度100ppm週5回法によるフッ化物洗口法
  - a フッ化物濃度によるう蝕予防効果の差
4. フッ化物洗口法のう蝕予防効果の持続性
  - a 中学校時点までのう蝕予防効果の持続性
  - b 20歳までのう蝕予防効果の持続性フッ化物濃度によるう蝕予防効果の差  
歯種によるう蝕予防効果の差

近年、わが国では健康日本21が策定され、都道府県においても地方計画が策定された。ほとんどの都道府県で12歳児のDMFT数の目標が挙げられており、2010年には到達目標値1~2の達成を目指し、う蝕低減のためにフッ化物配合歯磨剤の使用、フッ化物洗口法の導入が求められるようになった。我々のこれからの役割は、多くの研究成果を各地域住民にアピールすると共に、正しいフッ化物の知識を普及することである。

### 一般講演

座長 田村 康夫 教授

#### 1. 朝日大学歯学部附属病院内科病棟入院患者に対する口腔ケア

橋本 岳英<sup>1)</sup>・大山 吉徳<sup>1)</sup>・安田 順一<sup>1)</sup>  
玄 景華<sup>1)</sup>・青木 尚美<sup>2)</sup>・岡 直子<sup>2)</sup>  
野々垣静子<sup>2)</sup>・堀 ちくみ<sup>3)</sup>・宮本 洋通<sup>4)</sup>

(<sup>1)</sup>朝日大学歯学部総合歯科学講座  
障害者歯科学分野)

(<sup>2</sup>朝日大学附属病院歯科衛生部)

(<sup>3</sup>朝日大学附属病院看護)

(<sup>4</sup>朝日大学歯学部総合医科学講座内科学分野)

## 目的

近年、要介護高齢者の口腔ケアに注目が集まっているが、内科入院病棟において歯科医師や歯科衛生士によるプロフェッショナルオーラルヘルスケアの介入がみられる病院は少ない。今回、われわれは本学附属病院内科病棟において、内科医、歯科医師、看護師および歯科衛生士による内科入院患者に対する口腔ケアの取り組みを平成13年10月より始め一定の成果を得たので、その概略を報告するとともにその問題点を検討した。

## 方法および症例

内科入院患者に歯科医師による口腔健診を実施した。健診では口腔内状況、身体状況、口腔清掃の頻度や方法、義歯の扱いなど、21項目をチェックした。その後、口腔ケアの具体的方法を歯科衛生士に指示を出し、口腔ケアを開始するというシステムで行った。一回あたりの口腔ケア時間は20分程度とし、週1～3回で行った。平成13年10月より平成16年12月末までの3年2か月間、内科病棟入院患者に対して口腔健診を実施したのは207人で、そのうち口腔ケアを行ったのは138人であった。平均年齢は86.2歳(39歳～96歳)であり、内科的疾患では肺炎などの呼吸器系疾患が最も多く、次いで脳梗塞などの脳血管系疾患が多かった。死亡退院は25人いた。無歯顎者が67人、有歯顎者が140人であり、義歯使用は91人であった。その他に、外来での歯科治療を31人が希望し、歯科治療を行った。口腔内状況として歯科疾患や義歯の不適合等がみられた。有歯顎者140人中85名に齲蝕が認められ内科入院患者の中に多くの歯科治療を必要とするものが多いことがわかった。歯垢の付着や歯石の付着が多く患者にみられ、口腔内や義歯の清掃にも何らかの介助が必要な患者も半数以上いた。口腔ケアにより義歯の扱いや清掃方法などに興味を持った患者や介助者もいた。また自主的に義歯の新製や歯科治療を希望する患者もみえた。一方、痴呆など理解力や麻痺などの身体的機能の低下などの問題があると、口腔ケアの実施に困難がみられた。また、入院日数によって口腔ケアの回数に制限が生じることや、退院後の継続した口腔ケアの実施が困難であった。

## 考察

在宅もしくは施設入所高齢者の口腔ケアについては、入院患者の口腔内の状態をまだまだ改善すべき点がある。特に内科疾患患者の急性期においては口腔ケアを行うことが難しいのが現状である。そのために急

性期の患者に対しても、出来るだけ早期に歯科医師と歯科衛生士が関わることは重要であり、そのような体制作りが急務であると考えられる。栄養摂取の面からも、内科的疾患と歯科疾患が摂食嚥下機能障害に与える影響も大きい。

最近、口腔ケアに対する関心は大きくなってきているが、ケアの方法が分からないため積極的にケアが行えずにいる場合もみられる。歯科医師と歯科衛生士が内科病棟において口腔ケアの問題に積極的に介入することで、これらの問題を解決することが出来る。入院中に家族や介助者を指導することで、退院後も家族による口腔ケアが継続されることも期待できる。

近年、クリティカルパスを実施する病院が増えてきている。院内で肺炎や糖尿病など各疾患のクリティカルパスに口腔ケアを導入したいと考えている。これにより、医師、看護師、歯科医師と歯科衛生士の連携が緊密になり、より効果的な口腔ケアが行えると考えられる。今回の結果より、内科病棟において歯科医師と歯科衛生士が口腔ケアの問題に積極的に介入することの必要性を痛感した。

座長 関根 一郎 教授

## 2. 根尖孔外へ突出した破折器具の除去症例

口腔機能修復学講座歯科保存学分野

○堀 雅晴 関根 源太 仲宗根 歩 吉田 隆一  
関根 一郎

(朝日大学歯学部口腔機能修復学講座  
歯科保存学分野)

## 緒言

根管の拡大形成時、不良な器具の使用や不用意な操作によって偶発的に破折することがある。破折した器具の除去は高度な技術が必要とされるが、症例によっては除去できない場合もある。今回、根尖外まで突出した根管破折器具をマイクロスコープ下にて除去を試みた症例について報告する。

## 症例

患者は26歳の女性。上顎右側第二大臼歯の慢性根尖性歯周炎ならびに根管内器具破折の診断で、他医院より本学附属病院の口腔外科に精査を希望して紹介があった。診査では上顎右側第二大臼歯の口蓋根管内に器具の破折が見られ、破折した器具が根尖孔外に大きく突出していた。治療の為保存科に依頼された。患歯は7～8年前に麻酔抜髄、根管充填後、全部鑄造冠が装着され、その後無症状に経過していた。教年前より時々、咬合時の疼痛が出現するも放置していた。最近補綴物が脱離し、紹介医の元に来院したという。全身疾患に関する既往歴は特に認められない。